

平成22年度沖縄群島病虫害発生予報第11号(2月予報)

I 2月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降 水 量	日 照 時 間
高い(多い)	20	30	20
平 年 並	40	30	40
低い(少ない)	40	40	40

(平成24年1月27日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	17.1	19.8	14.8	119.7	87.1

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 2月の発生予報および防除上の注意事項

1 さとうきび

- 生育初期におけるメイチュウ類の防除対策
 - a 1月下旬の調査の結果、夏植圃場での芯枯茎率は17.1%であった。
 - b 圃場内外のイネ科雑草は発生源となるため、除去する。
 - c 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選定し施用する。
 - d イネヨトウが多発生している地域では、食入初期の幼虫を対象に防除を徹底する。
 - e 平成23年度病虫害発生予察注意報第2号(平成23年12月28日付)参照。

2 マンゴー

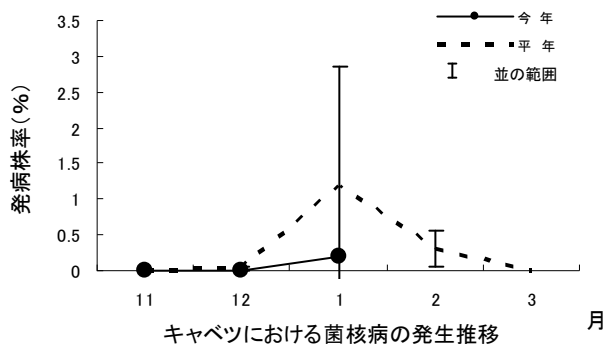
- 炭疽病の防除対策
 - a 1月下旬の調査の結果、一部の施設で炭疽病の発生がみられた。
 - b 本病の病原菌は花芽、花序、葉などにすでに潜在感染していることが知られており、収穫果実への被害軽減のため、今後袋がけ前までの防除対策が重要である。
 - c 罹病した新鞘、残渣は速やかに施設外に持ち出し処分する。
 - d 花芽分化～開花期には予防効果のある薬剤を選定し、定期防除に努める。

3 キャベツ

(1) 菌核病

発生程度 : 並
予報の根拠

- a 1月下旬の調査の結果、発病株率は0.2% (前年6.8%、平年1.2%)と平年並であった。
- b 本病は低温曇天下で発生しやすい。気象予報によると向こう1か月の気温の低い確率および日照時間が少ない確率が共に40%と予想されており、本病を助長すると考えられる。



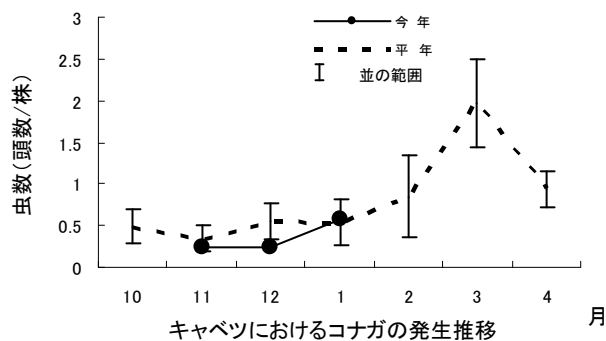
<防除上注意すべき事項>

- a 発病株は菌核を生じないうちに除去し、ビニール袋に入れるなどして密閉処理し、圃場外へ持ち出し処分する。
- b 例年発生時期に当たるので、予防防除に努める。
- c 平成23年度病害虫発生予察技術情報第9号(平成24年2月1日付)参照。

(2) コナガ

発生程度 : 並
予報の根拠

1月下旬の調査の結果、株当たり幼虫・蛹数は0.6頭(前年0頭、平年0.5頭)で平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a 圃場周辺のアブラナ科雑草の除去および収穫後の残渣処理を徹底し、圃場管理に努める。
- b 多発すると防除が困難になるので、低密度時に薬剤防除を行う。
- c 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

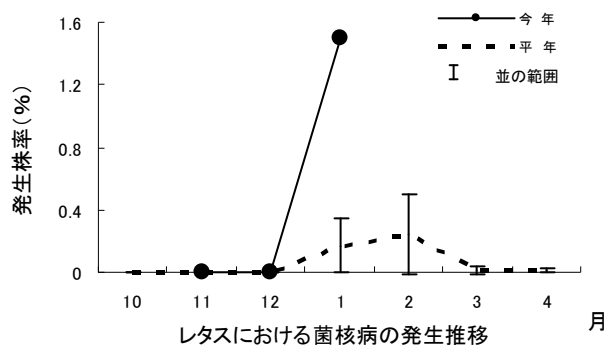
4 レタス

(1) 菌核病

発生程度 : 多

予報の根拠

- a 1月下旬の調査の結果、発病株率は1.5%(前年1.1%、平年0.2%)と平年より多かった。
- b 本病は低温曇天下で発生しやすい。気象予報によると向こう1か月の気温の低い確率および日照時間が少ない確率が共に40%と予想されており、本病を助長すると考えられる。



<防除上注意すべき事項>

- a 発病株は菌核を生じないうちに除去し、ビニール袋に入れるなどして密閉処理し、圃場外へ持ち出し処分する。
- b 例年発生時期に当たるので、早期防除に努める。
- c 平成23年度病害虫発生予察技術情報第9号(平成24年2月1日付)参照。

○ アブラムシ類の防除対策

- a 1月下旬の調査の結果、一部圃場で結球内に台湾ヒゲナガアブラムシの発生がみられた。
- b アキノノゲシ等の雑草にも寄生するため、圃場内や圃場周辺の除草を行う。
- c アブラムシ類の飛来を防ぐために、シルバーマルチを利用する。
- d 結球内部に侵入すると防除が困難になるので、結球前に定期的な防除を行う。

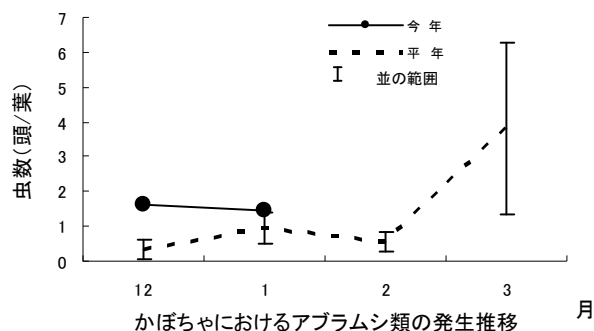
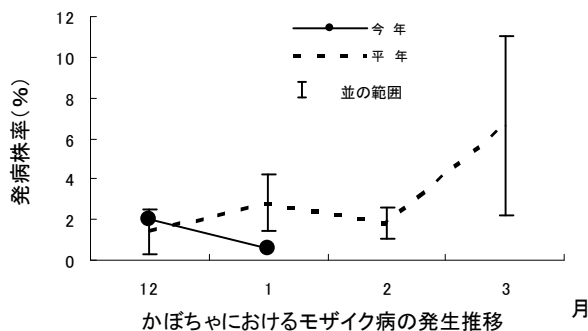
5 かぼちゃ

(1) モザイク病

発生程度 : 並

予報の根拠

- 1月下旬の調査の結果、発病株率は0.6%(前年9.3%、平年2.8%)と平年よりやや少なかった。
- 媒介虫であるアブラムシ類の葉当たり虫数は1.43頭(前年0.55頭、平年0.95頭)と平年よりやや多く、有翅虫の割合が高かった。また、発生圃場率は100%であった。



<防除上注意すべき事項>

- 圃場周辺に防風対策を兼ねた防虫ネット等の資材を利用して有翅虫の飛来侵入を防ぐ。
- 圃場周辺の雑草はアブラムシ類の発生源になるので除草を行う。
- 発病株は発生源となるので、見つけ次第抜き取りビニール袋に入れるなどして密閉処理し、圃場外へ持ち出し処分する。
- 本病は汁液伝染するので、ハサミや手の消毒、洗浄を行う。
- 収穫後の残渣は発生源となるので速やかに片づける。
- 平成23年度病害虫発生予察技術情報第8号(平成23年12月28日付)参照。

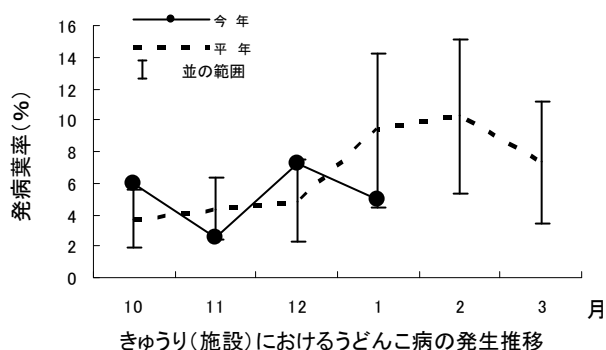
6 きゅうり(施設)

(1) うどんこ病

発生程度 : 並

予報の根拠

1月下旬の調査の結果、発病葉率は5.0%(前年29.3%、平年8.2%)と平年並であった。

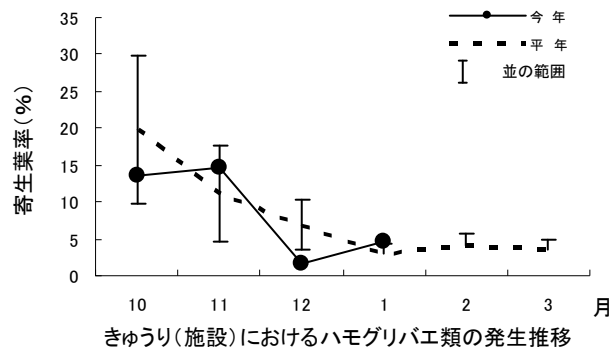


<防除上注意すべき事項>

- 過繁茂を避け、透光通風を良くする。
- 老葉や病葉は発生源となるので、圃場内に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分する。
- 多発すると防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努める。

- (2) ハモグリバエ類
 発生程度 : 並
 予報の根拠

1月下旬の調査の結果、寄生葉率は4.5%(前年0%、平年2.9%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a 多発すると防除が困難になるため、早期発見・早期防除に努める。
- b 発生源となる圃場内外の雑草を除去する。

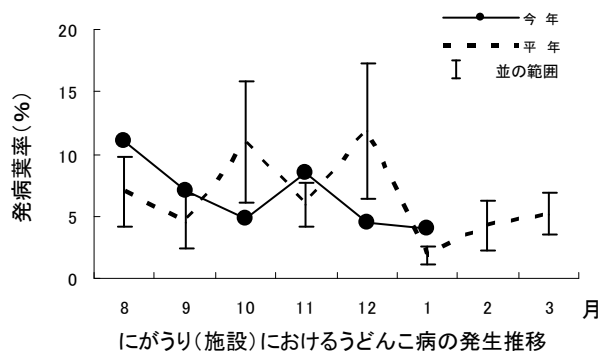
○ 黄化えそ病の防除対策

- a 1月下旬の調査の結果、発病株率は1.3%であった。また、一部圃場で多発生がみられ、発生圃場率は100%であった。
- b 着果前の発病株は、見つけ次第抜き取り処分する。
- c 媒介虫であるミナキイロアザミウマの防除を徹底する。
- d 施設内外の雑草は、ミナキイロアザミウマの発生源となるので、除草に努める。
- e ミナキイロアザミウマは薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

7 ながうり(施設)

- (1) うどんこ病
 発生程度 : やや多
 予報の根拠

1月下旬の調査の結果、発病葉率は4.0%(前年4.4%、平年2.3%)と平年よりやや高かった。



<防除上注意すべき事項>

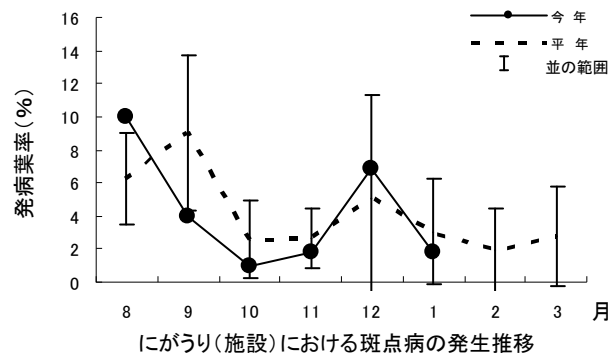
- a 過繁茂を避け、透光通風を良くする。
- b 老葉や病葉は発生源となるので、圃場内に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分する。
- c 多発すると防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努める。

(2) 斑点病

発生程度 : 並

予報の根拠

1月下旬の調査の結果、発病葉率は1.8%(前年20.5%、平年5.0%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a 老葉や病葉は発生源になるので除去し、圃場外に持ち出して処分する。
- b 過繁茂を避け、透光通風を良くする。
- c 多湿にならないよう、施設内の換気に注意する。
- d 葉をよく観察し、初期防除を徹底する。

○ モザイク病の防除対策

- a 1月下旬の調査の結果、一部の施設で発生がみられた。
- b 着果前の発病株は見つけ次第抜き取り処分する。
- c 施設内外の雑草は、本病の感染源および媒介虫であるアブラムシ類の発生源となるので、除草に努める。
- d アブラムシ類の防除を徹底する。

8 トマト

○ トマト黄化葉巻病の防除対策

- a 1月下旬の調査の結果、本島南部の一部施設で多発生がみられた。
- b 発病株は感染源となるため、早急に抜き取る。抜き取った株は必ずビニール袋に入れるなどして密封し、圃場外へ持ち出し処分する。
- c 施設内外の野生生えトマトは、本病の感染源および媒介虫であるタバココナジラミの発生源となるので、抜き取り密封処分する。
- d 黄色粘着テープ等により、タバココナジラミの早期発見・早期防除に努める。
- e タバココナジラミの薬剤防除を行う場合は、マルハナバチに影響の少ない薬剤を選定する。

9 さやいんげん(平張り)

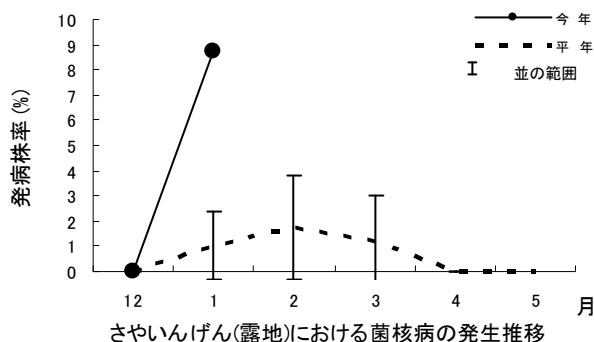
(1) 菌核病

発生程度 : 多

予報の根拠

a 1月下旬の調査の結果、発病株率は8.8%(平年1.0%)と平年より高かった。

b 本病は低温曇天下で発生しやすい。気象予報によると向こう1か月の気温の低い確率および日照時間が少ない確率が共に40%と予想されており、本病を助長すると考えられる。



<防除上注意すべき事項>

a 発病部位は、菌核が形成される前に早めに除去し、ビニール袋に入れるなどして圃場外へ持ち出し処分する。

b 多湿時に発生しやすいので、老葉は取り除き透光通風を良くする。

c 例年発生時期に当たるので、予防防除に努める。

d 平成23年度病害虫発生予察技術情報第9号(平成24年2月1日付)参照。

10 小ぎく(彼岸出荷用)

○ 白さび病の防除対策

a 1月の調査および関係機関からの情報によると、本島中部で本病の発生が増加している。また、中部および北部では、輪ぎくでも本病の発生が増加している。

b 多湿条件下で発生するので、不要な下葉、脇芽は除去し、通風をよくする。

c 発病葉は除去し、ビニール袋に入れるなどして圃場外に持ち出し、焼却などの処分を行う。

d 発生時期には予防散布を行うとともに、葉をよく観察し初期発生を見逃さない。

e 防除効果を高めるため、薬剤耐性菌が発現しないようローテーション散布を行う。

f 栽培終了後は近隣圃場や次作の発生源にならないよう、不要な株は速やかに処分する。

○ カメムシ類の防除対策

a カメムシ類は吸汁により生長点の芯止まり、茎の曲がり、花の奇形を引き起こす。

b 1月現在、発生の確認されている種は主にウスモンミドリカスミカメである。

c 圃場周辺の雑草や収穫終了圃場の残渣は発生源となるので、早めに除去する。